

近事雜聞

△水彩畫研究所三月例會には、成績畫の出品五十餘點、一等赤城泰舒氏の靜物畫、二等藤田規矩造氏の神田川の風景、三等鈴木一治氏の鬼子母神等なりし。

編者より

◎横濱KT氏へ 熱心家があらば月に一度位いは出張してもよろしい、先づ會員を集めて後具體的に本會へ交渉せられたし◎淺草小松生へ 大きな繪を切取つた様で位置が窮屈なり、調子も整つてゐない、先づ墨繪を充分稽古してそれから彩色にかゝられたし◎陸中海老名氏へ いつも申す通、色彩あまりに強烈なり、和らかな調子の繪を示されたし。

嘗て本誌誌友諸君より御懇篤なる御音信に接し居候處、昨年初冬の頃より病床に呻吟し今回遂に死去いたし、平素申居候素志を遂げ得ず諸君には甚だ欠禮仕候、物故後、夫々御回答可申上筈なれども、何分にも御宿所等不明の爲め誌上の一隅を藉り茲に生前辱知の諸君に申譯旁御厚情奉謝候

(神戸市北長狹通壹丁目百十四

枯星の兄 中臺藤吉

色版になつて嬉しいな、殊に今度の大下先生の繪はあんな圖はいくらも近處にころがつてゐるのに僕等の描かないのを諷し且大なる教訓を與へて居る、猶挿繪として大下丸山兩先生筆の畫を寫眞版で毎號澤山に願ひたし(横濱YT生)『みづゑ』一二三號頃のやうに寫眞版として大下先生の作品を多く出されたし、吾等筆遣ひを見るに極めて便利多し(KT)■文房堂で一寸立つてゐたらハイカラな青年が來て繪具を見せて呉れといふので、店員が「へーどんなのに致しませう」上等箱入を呉れ「これは三圓ですが如何さま」少し高いコレはいくら「ソレは七十五錢で」これがよろしい「ハイカラは大いに上等品を買ふたやうであつた(淺草小松)■大阪で開く水彩畫の講習會は一日も早く御發表を願ひます(熱望生)■心配のあまり蕪言を呈し候處早速御答を得て安心致候、ある者は名のため、ある者は利の爲め、ある者は自己の伎倆を他人と比較し研究するために博覽會へ出品さるゝといふ、其思想に高下こそあれ何れも利己的であるが、春鳥會諸先生の、趣味の普及の爲めと言はれたには實に何共申様のない感謝の念が起り申候(本郷紅生)■三宅先生の博覽會出品「森の下道」は千三百圓ときいてゐたが正札は百三十圓となつてゐた(物好生)■一寸博覽會の水彩畫の賣價を紹介します、三宅氏森の下道全紙百卅圓、全雲四

ッ切七十圓、河合氏夏日二ッ切百圓、大下氏江流二ッ切百五十圓、中川氏月夜百圓、とりいれ百五十圓何れも二ッ切、丸山氏麥燒く夕全紙二百五十圓、夏の光二ッ切百圓、織田氏樂器全紙二百圓、大橋氏牡丹、鶴ヶ岡何れも二ッ切で百圓宛、石川氏滿洲の風景三枚の方が二百圓、二枚の方が百五十圓まづ此位にして置ふ(PH)『みづゑ』誌上に博覽會出品の水彩畫評を載せること、それから大下、丸山、大橋諸先生の出品畫を寫眞版(出來得べくは石版)で出されたく切望する(歸り途にてS生)■三宅先生の事を三宅博士の弟だと博覽會の看守が知つたふりで説明してゐた、一條成美君は公爵の兄弟かも知れない(傍聽生)■石川欽一郎氏の繪はガラスが壞れてゐる、三宅の克己氏の繪は殆ど縁との間に白く紙が見える何れも不體裁だ(麻布永坂生)■『みづゑ』二十三の「丘の細道」は素敵に出來榮がよかつた靜かに目をつぶて見ると前景の道と枯木と、中景の森とが鮮かに浮んで來る實に十三の「夕雲」以來目の覺むる様だつた■長野講習會の記事を読んで實に羨しかつた我關西にもかゝる會の開かれんとを希望します■三 本誌の「二」の簡易寫生法を讀んで大くの利益を受けたるものは僕ばかりではあるまい何卒あのやうなのを益々掲載されんことを願ひます(福岡、稻垣虹の橋)◎二 此度大阪迄御出なさい